

東北大学情報科学研究科言語変化変異研究ユニット主催
講演会
2017年3月11日 東北大学青葉山キャンパス

コーパスからわかる英語における周辺構文の諸相 —動的文法理論の立場から—
大室剛志 (名古屋大学)

1. はじめに

2節で梶田 (1977, 1986, 1997, 2002, etc) と彼の一派で開発中の動的文法理論について手短かに紹介します。チョムスキーやその他の理論言語学者は「可能な文法」を定義する際に、もっぱら大人の文法の形式特徴のみを見て定義し、言語習得の途中の段階において何が起こりえるのかに言及して、「可能な文法」を定義することはありません。この意味で彼らの文法理論は「静的」であります。対照的に梶田は、「可能な文法」を定義する際に、言語習得のある段階から次の段階への移行の可能性に言及することによって「可能な文法」を定義すべきであると強く主張します。この意味で彼の文法理論は、「動的」といえます。

2. 動的文法理論の概略

この節では、Kajita (1977, 1986, 1997, 2002, etc)及び彼の一派によって開発中の動的文法理論について手短かに紹介します。

チョムスキーは「可能な文法」を定義するのに、もっぱら大人の文法の形式特徴だけを使って定義し、言語習得の過程で何が起こりうるのかについては一切言及しません。すなわち、彼は「可能な文法」という概念を次の理論書式で定義しています。

(1) THEORY-FORMAT (I):

Rules of type W are possible in G , where W makes no reference to pre-adult grammars.
(Kajita 1983: 4)

梶田は、この種の「可能な文法」の特徴付けにのみ頼っているのは、広範囲の複雑な経験的事象を含みこんで説明することもできないし、また、言語習得に子供が成功するという事実にも説明が与えられるほどには「可能な文法」という概念を厳しく制限することができないと強く主張します。そこで、梶田は、理論書式(I)を以下の理論書式(II)で置き換えることを示唆します。

(2) THEORY-FORMAT (II):

(II-A) Rules of type X are possible in G .

(X : far more restrictive than W)

(II-B) If rules of type Y are in G_i^j , then rules of type Z are possible in G_{i+1}^j .

(Superscripts: particular language; subscript: stages of acquisition)

(Kajita 1983: 4)

理論書式(I)と理論書式(II)との決定的相違は、後者が(II-B)を許しているのに対して、前者はそれを許していない点です。理論書式(II-B)は、「もし、ある言語 j のある習得段階 i の文法で、

Y というタイプの規則 (群) があるならば、その言語 j の次の習得段階 i+1 の文法において Z というタイプの規則 (群) が可能になる」と言うことによって、言語習得のある段階から次の段階に移る移行に言及しています。その移行に言及することによって、「可能な文法」という概念の定義に寄与します。他方、理論書式(I)は、大人の文法の形式特徴だけを見て、この規則は可能、この規則は不可能の区別を単に指定するだけで、習得のある段階から次の段階への移行については何も言及しません。この意味で、理論書式(I)は、「静的」であるのに対し、理論書式(II)は「動的」です。梶田に従い、(II-B) の陳述を含む言語理論を動的文法理論 (A DYNAMIC THEORY OF GRAMMAR) (以下, DTG) と呼ぶことにします (Kajita 1984 参照)。

詳細な議論は省きまして、ここでは、動的文法理論が静的文法理論より優っているいくつかの点を述べることにします。

第一に、ある言語 j の次の習得段階 i+1 の文法の可能な規則の集合はタイプ W の規則の集合よりもずっと小さい (Kajita 1983: 4)。このことは、DTG が、言語習得の成功をよりたやすく説明できることを意味する (cf. Kajita 1983: 4)。

理論書式(II)は、上で述べたように、言語習得のある段階から次の段階への移行に言及する。これは第二の優っている点につながる。つまり、習得の発達過程が一般言語理論により、より直接的に説明される (Kajita 1983: 4)。

静的理論だと必要になる有標性に関する特別な理論を構築する必要がなくなる。というのも、理論書式 (II) 自体がある一定の規則 (群) がある意味で、他の規則 (群) よりもより基本的であることを述べているからである。ここで、思い出していただきたいことは、(II-B)は、有標性とは別個に独立して、「可能な文法」できるだけ狭く絞り込むためにそもそも動機づけられたものであるということである (Kajita 1984 and Yagi 1984)。私達は、理論書式(II)を現在の生成文法理論を基本的な規則と派生的な規則とを区別できるように修正していかないといけない、ということを示唆しているものと解釈できる。

3. 統語と意味の乖離と同族目的語の決定詞

3.1. はじめに

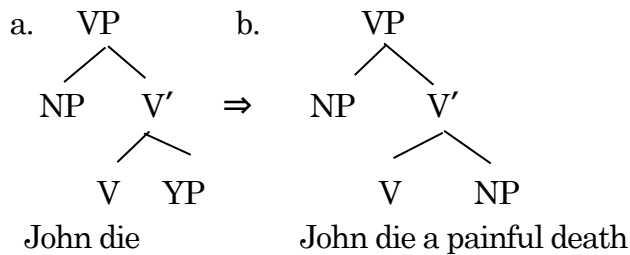
先程述べましたように、動的文法理論(Kajita (1977, 1997, 2002)等参照)は、習得結果の大人の文法だけを見て「可能な文法の類」を絞り込むのではなく、言語習得の中間段階の文法のありようにも言及することで、可能な文法の類を絞り込む。この点で、動的文法理論は、従来提案されて来た文法理論のいずれとも異なります。

そのような動的文法理論にあつて、1977年の提案当初より、統語と意味の乖離という概念は、その理論の最も中心的な概念の一つとして捉えられています。具体的には、統語と意味の乖離 (syntactico-semantic discrepancy)は、統語と意味の重複 (syntactico-semantic overlapping)と並んで、言語習得過程の一つである付加過程 (additive process) を活性化する条件として捉えられている。当該文法の習得のある段階までに獲得された規則群がこの条件を満足した時、付加過程が活性化され、それにより、これらの規則群に基づいた新種の規則が、習得の次の段階で当該文法に導入されうることになる。

この統語と意味の乖離は、主要部と非主要部の衝突 (head-nonhead conflict) と不十分な局地化 (insufficient localization) という具体的な形となって現われる。主要部と非主要部の衝突という条件下で、当該文法に新たに導入される規則が、この主要部と非主要部の衝突を除去する統語的再解釈規則 (rules of syntactic reinterpretation) である。

3.2. 同族目的語形成と統語と意味の乖離

(1) 同族目的語形成



The Child Language Data Exchange System (MacWhinney and Snow (1990)参照)を検索すると、die と同類に属する smile に関して、Adam という子供は3歳4ヶ月1日、Abe は2歳10ヶ月3日で自動詞としての smile を発話しているが、どちらの子供もそれまでには、smile の同族目的語構文を発話していない。

(2) a. Pauline smiled.

smile₁: [x do 'smile']

b. Pauline smiled her thanks.

smile₂: [x EXPRESS y BY [x DO 'smile']]

(3) Pauline smiled a happy smile.

smile₃: [x PRODUCE y BY [x DO 'smile']]

3.3. 同族目的語の決定詞

3.3.1. the の生起

一看すると、the が生起している例が、The British National Corpus (BNC)から検索された249例の smile の同族目的語の中に、13例存在する。ただし、それらの the の生起を観察して見ると、

(4) a. Mark smiled **the** bitter smile of a disillusioned corporate executive and walked out of the office, closing the door slowly and carefully behind him. (AC2 2536 n/a)

b. The "Iron Lady" as she was called, smiled **the** steely smile which was so familiar on the television screen and in the press. (AC 21598 n/a)

c. Ramsbum smiled **the** smile of pure malevolence that Amiss had come to expect of him. (HTG 34 n/a)

(4a)のように of 句により後置修飾されているものが6例、(4b)のように制限的關係節によって後置修飾されているものが6例、その両方により後置修飾されているものが(4c)の1例あり、これらの例における the は、いずれも、後置修飾により要求されてくる定冠詞の the の用法であり、話者と聴者がその名詞句について文脈等から同定可能な場合に用いる、いわゆる真性の定(definite)を示す the の用法ではないことになる。

3.3.2. this smile 対 that smile

「この」という直示的 (deictic) な用法の **this** を決定詞の位置にとる同族目的語もまた皆無である。これとは対照的に、感情的色彩を込めて用いる「例のあの」「あのような」といった意味を表す指示形容詞としての **that** を決定詞の位置にとる同族目的語は、(5)を含めて17例存在する。

- (5) a. He smiled **that** charming, sardonic smile. (APW 2954 n/a)
 b. He paused and smiled **that** quick, bright smile of his. (H97 2345 n/a)

3.3.3 一定の独立関係節の生起

- (6) a. He smiled what I thought was a cynical smile.
 b. Rover barked what I would characterize as a friendly bark. (高見・久野 (2002:144))

- (7) a. She indicated the chair, and smiled what she hoped was a reassuring smile. (JXW 611 n/a)
 b. “A big chicken,” he said, smiling what he hoped was a disarming smile. (F9C 588 n/a)
 c. Marcus again smiled what Ludens saw as a mysterious complicit smile, as if Ludens were a talented tempter who was at the same time a fellow initiate. (APM 1701 n/a)

- (8) a. There was what appeared to be a jackknife on the table.
 b. There was what she thought was a gun on the table. (梶田 (1985: 38))

3.4. まとめ

本節では、動的文法理論における統語と意味の乖離の観点から、同族目的語の形成と同族目的語の決定詞に関するいくつかの属性を説明してきた。

4. 統語と意味の乖離とある種の挿入節

- (1) Nobody knows, the fact is. (Bolinger (1972:67))

(2) The fact is that nobody knows.

(3) In fact, nobody knows.

(4) [s The fact is that [s nobody knows.]]

(5) [s_{Adv} The fact is that][s nobody knows.]

(6) The fact is, nobody knows.

(Bolinger (1972:67))

(7) Nobody, the fact is, knows.

(8) Nobody knows, the fact is.

(9) That chapter was basically written in the late 1950s, the fact is, in 1958-1959, around then.

(10) And they've been checking up on things, and it seems that I took too much time between the lodge and the house – time enough, **the implication is**, to leave the car, run round the house, go in through the side door, shoot Christian and rush out and back to the car again.

(Agatha Christie, *They Do It With Mirrors*, Fontana, pp.113-114)

(11) a. Fact is, it must have been done!

(Agatha Christie, *And Then There Were None*, Fontana, p.80)

b. Fact is, we've been getting complaints.

(Arthur Hailey, *Hotel*, Pan Books, p.205)

(12) If the grammar of a language L at stage i, G(L,i), has property P, then the grammar of the language at the next stage, G(L,i+1), may have property P' . (Kajita (2002: 161))

動的文法理論は(12)型の法則をなるべく豊富に UG に設けることで「可能な文法」の類を狭く絞り込もうと試みる。従って、ある習得段階の文法が次の習得段階でどのように拡張されるのか、何が既に可能な時に、何が次に可能になりうるのか、という法則を明らかにすることが、言語理論の第一義的な課題である「可能な文法」の類の絞り込みに直接貢献する。

(12)は、「可能な文法」の類を狭く絞り込むという言語理論の第一義的課題を果たすためのものだが、同時にまた、文法理論の中である種の有標性を規定している。(12)型の法則は、言語の核から周辺まで連続的に働いている。従って、英語の細部の言語事実もおろそかにせずしっかりと見ていくことがこの法則の発見につながる。尚、最近のこの構文に関するコーパスを使つての優れた研究については、柴崎(2015, 等)を参照されたい。

5. I'd rather you leave now. の you は主格か目的格か

(1) 'I don't meet anyone, Mother, but why did you say that.'

(「誰にも会っちゃいないさ、母さん、でもなんで会っているなんていうんだい。」)

She shook her head. 'Because I can't imagine what else you'd do.'

(彼女は首をふった。「だって、他のことをしているとはとても思えないもの。」)

'But what do you mean by "meet someone".'

(「でも『誰かと会ってたんじゃないか。』ってそれいったいどういうことだい。」)

'Let's forget it.'

(「じゃ、忘れてちょうだい。」)

'No.'

(「そうはいかないよ。」)

'Benjamin, I'm not going to pry into your affairs,' she said, 'but **I'd rather you didn't say anything at all than you didn't say anything at all than be**

dishonest.'

(「ベンジャミン、あなたの色恋沙汰に首を突っ込もうとは思わないわ、でも、嘘をつくぐらいならむしろ何も言って欲しくはないわ。」)

この例のように、1)補文となる節は仮定法、中でも仮定法過去が用いられ、2)'d rather が節を従え、3)補文標識 **that** が無く、4)主節の主語と補文の主語が異なる形で使われるのが普通である(なお、それぞれの特徴を欠いた変種の存在については、拙論(2000)を参照)。

- (2) a. "I'd rather **they** gave me the money," Joesaid. (Harold Robbins, *The Storyteller*)
 b. 'That's right. Unless you'd rather **we** carried on until we were out of gas--- probably halfway across the Pacific.' (John Castle and Arthur Hailey, *Flight into Danger*)
 c. I added, 'Would you rather **I** left you before you got back into town?' (Agatha Christie, *Endless Night*)
 d. Or would you rather **she** came to see you? (Agatha Christie, *Elephants Can Remember*)

問題の構文が 473 例得られる。そのうち、明らかに目的格が補文の主語位置に現れている例が、10 例存在する。その全てを(3)に挙げる。

- (3) a. So if she was going to have anything I'd rather **her** come to me. <brspok>
 b. If she's going to try it I'd rather **her** get it from me than you know everywhere else # Cos you don't know what they're getting for a start. <brspok>
 c. I'd rather **him** have stayed there because I agree with some of his views. <bbc>
 d. I'd rather **him** sell a lot of records rather than some idiot at EMI... <brmags>
 e. I'd rather **them** be successful than fail, for music's sake. <brmags>
 f. ...I would rather **them** learn to understand that those are television programmes... <brspok>
 g. You would rather **them** invest in something that produces no income at the moment... <brspok>
 h. We'd rather **them** come in. <brspok>
 i. You know I'd rather **them** get me up... <brspok>
 j. But the risk that students will stumble on to something on the net that their teachers and parents would rather **them** not see is obvious. <oznews>

- (4) a. 補文標識の **that** が無い。
 b. **should** などを伴わず形態的に動詞の原形の形のみが用いられている。

- (5) Calgary said slowly: 'They'd rather, you mean, **that Jack Argyle** was guilty?' (Agatha Christie, *Ordeal by Innocence*)

- (6) 'They'd rather, you mean, **that he/*him** was guilty?'

(7) I would rather **that the enterprise be judged** on its merits than dismissed because it doesn't address issues that someone calls the True Issues of Semantics.

(Ray S. Jackendoff, *Semantic Structures*)

(8) ...we thought that everyone concerned would rather **the bowls should sell** rather than the Association be left with a fine gallery of unsold pieces. <brmags>

(9) I'd rather **he come and get** it off me. <brspok>

『英語語法大事典・第3集』(p.64)の質問者は、(10)の文を示し、you を主格ととってよいかという疑問を発している。

(10) I'd **sooner you** stay down here and die in peace.

補文の主語位置に明らかに目的格が現れている例となると、約3億2900万語からなる Bank of English (検索当時) にすら、(3)に挙げた10例が含まれるにすぎない。100万語はペーパーバックほぼ10冊に相当する。そうすると、3290冊読んでやっと10例収集される勘定になる。しかも、当該の例を1例見つけた後、残りの9例を見出すのにあまりに間があいたのでは、この節で指摘したような言語事実に気が付かない。このことは、従来の手作業による資料収集では、全く不可能とはいわないまでも、気付くことが極めて困難な言語事実を、大規模コーパスを利用するならば瞬時に指摘することが可能となることを意味する。

6. He had decided to *feel* his way *cautiously*. についての検討

(1) [NP V one's way PP]

(2) a. Horticulture was a new course so the staff were *feeling their way* just as much as the new batch of students.

b. But it quickly hushes up as another group *gropes its way*, begging for assistance.

(Wall Street Journal Corpus, Kuno and Takami (2004: 81), 岩田 (2007: 8))

c. She found it was not possible even to get up out of her seat without shoving people, *elbowing her way*, pushing past them.

d. We must *fight our way* to meet our Brothers to warn them.

e. We *made our way* slowly. (BNC, 岩田 (2007: 9))

(3)a. Be a little careful, please! The hall is dark and you might stumble... Here where the hall turns and dives into utter darkness is ... a flight of stairs. *You can feel your way*, if you cannot see it. <usbooks>

(お願いだから、よく注意してよ。廊下が暗いから、つまづくかもしれないわよ。廊下は曲がって真っ暗になっちゃたここが階段よ。見えないから、手探りで進んでって。)

b. At the bottom you encounter a subterranean passage, curving away in the darkness. The effect is disorientating. As you walk, *feeling your way*, you hear the sound of water in the distance. The last stretch of the tunnel is dark. <times>

((タワー)の底のところで地下通路にあたり、その地下通路は暗闇へと曲がっている。だから、方向がわからなくなる。手探りしながら、歩いて進んでいくと、遠くに水の音がする。トンネルの最後のところもまた暗い。)

- (4)a. Wills says that in 1990, *when he founded his spin-off at BA, venturing was just starting to feel its way.* <times>
 b. Until the weekend, five of Roeder's seven games in charge had been away - *a tough start for anyone, let alone a rookie who is feeling his way.* <sunnow>
- (5) a. He had decided to feel his way *cautiously* where Keating was concerned and for the time being stick to the story that he was the victim of a marital dispute. <brbooks>
 b. Instead he feels his way *instinctively.* <brnews>
 c. He's just a young lad and just feeling his way *like everyone else.* <brrnews>
 d. Despite elaborate preparation we were audibly feeling our way *minute by minute.* <brnews>
 e. After a couple of weeks of this, his PA Cindy White tells me, he gets back into a rhythm, on the roll for the next season, feeling his way *slowly*, picking up inspiration from the streets, his travels, nightclubs, his friends;... <brmags>

7. They made their separate ways to Europe. について

- (1) a. They made their separate ways to Europe, Pamela going home to England and Gunther to his native Germany. <brbooks>
 b. It deteriorated yet further when the unhappy pair made their separate ways to Oslo to collect their Nobel Peace Prize in 1993. <brnews>
 c. With visible reluctance they touched hands; and then they swung about and made their separate ways out of the ring, walking very carefully, as though they were in some danger of falling again. <usbooks>
 d. The staff then tracked the movements of the men after they made their separate ways. <oznews>
- (1) a. The bikini, the miniskirt and the Beatles made their trendsetting ways from Europe to the United States, ... "Early language lessons arrive in U.S." By Sheila Flynn (The Associated Press)
 b. And so that was it, until the party broke up and we all made our different ways home. <brbooks>
 c. And so we made our separate ways to the little basement apartment to enjoy the meal that Sigmund Sichel had spent three days preparing. <usbooks>
 (due to Naohiro Takizawa)
- (2)a. We made our way into a bar, which is one of those rooms decorated not with taste or enthusiasm, but with the mortal fear of being passe. <times>
 b. Instead they made their way to Heathrow from all parts of Ireland and Britain, grabbed a sandwich in the departure lounge, boarded the flight for Chile and braced

themselves.

<times>

(3) [NP V one's way(s) PP]

(1)a. They made their separate ways to Europe, Pamela going home to England and Gunther to his native Germany. <brbooks>

(4) a. * They made their separate way to Europe, Pamela going home to England and Gunther to his native Germany.

b. * It deteriorated yet further when the unhappy pair made their separate way to Oslo to collect their Nobel Peace Prize in 1993.

c. * With visible reluctance they touched hands; and then they swung about and made their separate way out of the ring, walking very carefully, as though they were in some danger of falling again.

d. * The staff then tracked the movements of the men after they made their separate way.

(5) a. *One by one* the teachers made their ways to their homes--; modest, mostly celibate, mostly cheerless homes. (BNC: H8Y)

b. Eighteen years later, when Hitler overran France in 1940, he ordered the Gestapo to find mother and son, who had *independently* made their ways to Paris.

(TIME CORPUS of American English (1997/11/14))

(6)a. *One by one* the teachers made their way to their homes--; modest, mostly celibate, mostly cheerless homes.

b. Eighteen years later, when Hitler overran France in 1940, he ordered the Gestapo to find mother and son, who had *independently* made their way to Paris.

Jackendoff (1990), Jackendoff (2002), Culicover and Jackendoff (2005) のように、構文イデオムを形と意味の組み合わせの対として単純に辞書に載せただけでは不十分で、今後、構文イデオムと一般的な文法のメカニズムがどのように相互作用し合うかを規定していく必要があると思われる。

8. 半動名詞構文について

8.1. はじめに

(1) a. He spends a few minutes looking at the footprints outside the Chinese Theatre.

(COHA, 2007, FIC)

b. He spends a few minutes in looking at the footprints outside the Chinese Theatre.

- (2) (After *to employ*, *to spend*, *to waste*, and verbs of a similar import, and also after the adjective *busy* and its synonyms, the preposition *in* is sometimes dispensed with. This changes the status of the *ing*-form, converting it into a present participle in the grammatical function of predicative adnominal adjunct. After *to spend* and *to waste* the omission of *in* is met with only when these words are accompanied by an adjunct denoting a length of time. (Poutsma (1928: 903), 下線部は大室)

(3) John came running.

そこで、拙論 (1988, 2015)では、(3)の-ing 形と(1a)の-ing 形の振る舞いを比較することで、(1a)の-ing 形の現代英語における資格について、動名詞の性質をわずかに備えた限りなく現在分詞に近いものとし、(4)に示したように、半動名詞構文(4c)は、言語習得の途中のある段階で、(4a)の in 付き動名詞を基体 (basic form) として、(4b)の準述詞構文の-ing 形をモデルとして、派生体 (derivative form) として導かれると結論した。

- (4) a. G_i^E Basic Structure: [s He [VP was spending [NP his vacation] [PP in working at the factory]]].
 b. G_i^E Model Structure: [s He [VP came [VP running]]].
 c. G_{i+1}^E Derived Structure: [s He [VP was spending [NP his vacation] [VP working at the factory]]]. (cf. 大室(2015: 162))

(5) 述詞のパラダイム

a	b	c	d	e
NP	AP	-en	-ing	PP

(大室 (2015: 164))

- (6) a. *Two long-haired groupies spent an hour *real nuisances* at the concert. (NP)
 b. Daedalus is designing a novel house extension, a variable-pressure bedroom, which may purchase an extra few years of life for its proud owners by slowing the metabolic rate of that third of their lifetime which they spend *asleep*. (AP) (BNC, A98 321)
 c. For thousands of children who spend their days *locked up in the shanty towns* while their parents work, the streets offer freedom and escape from domestic violence as well as a springboard to prostitution or petty crime. (past participle) (BNC, A46 52)
 d. Masao was spending his vacation *working at the Matsumoto factory*. (?present participle)
 e. She and Henry spent their spare time *in country clothes*. (PP) (JF, p.7) (大室 (2015: 157-159))

8.2. Arai (1997)

Arai (1997)は、the *Oxford English Dictionary (Second Edition) on Compact Disc* をコーパスとして見立てて検索し、in 付き動名詞構文と半動名詞構文の歴史的分布と発達に関する大変貴重

な言語資料を発掘している。(7)は、Arai (1977)の作成した表を一部抜粋したものである。

(7)

	1500	1550	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	1950	1970-P
spend TIME in Ving	3	9	24	22	17	11	16	31	14	10	2
spend TIME Ving		1	1	3	1	1	1	20	86	86	74

(Arai (1997: 190)より一部抜粋)

(8) 1549 CHALONER *Erasm. on Folly* M ij, He had *spent* whole xxxvi yeeres together *in studying* the Phisicals and Vltra ~ mundans of Duns and Arstotle.

(Arai (1997: 183))

(9) 1665 PEPYS *Diary* 23 June, We *spent* two or three hours *talking* of several matters soberly and contentfully to me.

(Arai (1997: 183))

半動名詞構文は、1850年代の20例で一気に多く使われ出し、1900年代では動名詞構文を逆転する

- (10) a. 19世紀後半に、半動名詞構文は多く使われ出す。
 b. 19世紀後半か20世紀前半に、それまで優勢であったin付き動名詞を逆転し、半動名詞構文が優勢となる。
 c. 1970年以降in付き動名詞構文よりも、半動名詞構文は圧倒的に優勢な資格を得る。

8.3. 構文成立後の展開：COHAからの言語資料

COHAでの検索式を[spend].[v*]として検索するとspendについては40822件、spendは22973件、spendingは約7225件、spendsは2790件となり、件数が膨大である。そこで、今回はspendsの2790件に限り、自分の目で実際の資料を全て見て分析し、無関連な例を排除し、分類した。

8.3.1. in付き動名詞構文と半動名詞構文の歴史発達：COHAからの資料による確認

(11)

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
spends TIME in Ving		4	2	9	7	4	8	10	2	7
spends TIME Ving				1		2	4	11	7	11

	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000-9
spends TIME in Ving	4	9	2	2	5	1	0	1	0	0
spends TIME Ving	14	31	40	55	51	68	75	74	120	127

- (12) When he *spends a whole night "coon-hunting,"* and is obliged to sleep half the next day, and feels good for nothing the day after, it is impossible to convince him that the "varmint" had better been left to cumber the ground, and the two or three dollars that the expedition cost him been bestowed in the purchase of a blanket.

(COHA, 1845, FIC)

8.3.2. 半動名詞構文の成立とそれに伴う他の叙述述語の出現

8.3.2.1. 過去分詞

(13)

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
spends TIME V-ing				1		2	4	11	7	11
spends TIME V-ed										

	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000-9	合計
spends TIME V-ing	14	31	40	55	51	68	75	74	120	127	691
spends TIME V-ed				2		1		1	4	7	15

- (14) a. Agent Donat arrives by parachute, *spends a few minutes disguised as a Rumanian peasant*, then transforms himself into Tartu, a Rumanian Iron Guardist, reeking with pomade, corny gallantries and devotion to the New Order. (COHA, 1943, MAG)
- b. Sometimes Pennington spends *half a foggy night crouched beneath a bedroom window* to which he has affixed a microphone. (COHA, 1946, FIC)

8.3.2.2. 形容詞句

(15)

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
spends TIME V-ing				1		2	4	11	7	11
spends TIME AP		1								

	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000-9	合計
spends TIME V-ing	14	31	40	55	51	68	75	74	120	127	691
spends TIME AP				2		1		1	4	7	16

- (16) *Heedless at church she spends the day,* For homelier folks may serve to pray, And for devotion those may go, Who can have nothing else to do. (COHA, 1820, FIC)
- (17) Brought up on the idea that being "popular" means having lots of dates and parties all the time, *every evening she spends alone* becomes to her evidence of social failure and must be avoided like poison. (COHA, 1942, MAG)

8.3.2.3. 叙述述語の前置詞句

(18)

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
spends TIME V-ing				1		2	4	11	7	11
spends TIME Pred PP	1				4			1	2	

	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000-9	合計
spends TIME V-ing	14	31	40	55	51	68	75	74	120	127	691
spends TIME Pred PP		4	1		1	1	5	1	3		24

(19) This man to suffer more To rule, whose only right to France is might, While Louis exiled *spends* his days *in grief*, Our names would pass to future times, not styled Deliverers of mankind, but scourges, pests, And murderers of our race.'

(COHA, 1815, FIC)

(20)

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900
spends TIME Loc PP/Adv		2	8	13	12	15	17	34	27	21
spends TIME Pred PP	1				4			1	2	

	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000-9
spends TIME Loc PP/Adv	29	51	62	55	55	74	74	86	120	124
spends TIME Pred PP		4	1		1	1	5	1	3	

(21) He spends most of his hours *in the library*.

(COHA, 1835, FIC)

8.4. 現代英語における構文成立後の展開と見られる変異形について

(22) *A deprecating smile was smiled by Miss Marple. (大室 (1990: 75))

Horita (1996)、Matsumoto (1996)、高見・久野 (2002)、拙論 (2004)で受け身が適用されている(23)のような例が指摘されている。

(23) a. Pictures were taken, **laughs were laughed**, food was eaten.

(高見・久野 (2002: 166))

b. And the crowd responded with such outpourings of enthusiasm as I have never before witnessed. **Screams were screamed, cheers cheered, sighs sighed**, underwear thrown.

(高見・久野 (2002: 166))

c. **Hugs were hugged, smiles were smiled**, hands were shaken.

(大室 (2004: 148))

(24) They smiled a happy smile.

- (25) a. Marilyn Monroe's smile was smiled perfectly by all the contestants.
 b. The biggest smile I ever saw was smiled by my father.
 c. Various smiles were smiled for the photographer by the actress.
 (Horita (1996: 243))
 d. The laugh of a very disturbed man was laughed by Neil.
 e. The smile of a woman who knows what she wants was smiled by the actress.
 (Rice (1987: 214)) (Horita (1996: 244))

Matsumoto (1996), Horita (1996), Mamiya (2011) (大室 (2013)参照) . 小薬 (2010)

8.5. むすび

資料の出所とその省略

1. AMIA=Agatha Christie, *A Murder is Announced*. (First published 1950.) Fontana Books. Collins, Glasgow. Pp.221
2. ABH=Agatha Christie, *At Bertrams's Hotel*. (First published 1965.) Fontana Books. Collins, Glasgow. Pp.223.
3. NF=Sidney Sheldon, *The Naked Face*. (First published 1971.) Pan Books, London. Pp.222.
4. Godfather=Mario Puzo, *The Godfather*. (First published 1969.) Pan Books, London. Pp.448.
5. Storyteller=Harold Robbins, *The Storyteller*. Pocket Books, New York. 1985. Pp.341.
6. A=Deborah Chiel (based on a screenplay written by Tom Topor), *The Accused*. Pocket Books, New York. 1988. Pp.176.
7. Pelican=John Grisham, *The Pelican Brief*. Island Books, New York.1992. Pp. 436.

参考文献

- 安藤貞雄 他 (編) . 1981. 『英語語法大事典・第3集』東京：大修館書店.
 新井洋一 . 1996. 「近代英語における「従事」の意味を表す構造文の諸相」『英語コーパス研究』.
 第3号. 1-26.
 Arai, Yoichi. 1997. A corpus-based analysis of the development of “in dropping” in the *Spend Time In V-Ing* Construction. *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*. ed. by M. Ukaji et al. 181-196. Tokyo: Taishukan.
 Bolinger, Dwight. 1972. *That's That*. The Hague: Mouton.
 Culicover, Peter W. and Ray S. Jackendoff. 2005. *Simpler Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
 Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
 岩田彩志. 2007. 「移動動詞に後続する経路前置詞句と構文理論」『英語青年』. 第152巻11号. 646-649. 東京：研究社.
 原沢正喜. 1959. 『現代口語文法』東京：研究社.

- Horita, Yuko. 1996. English cognate object constructions and their transitivity," *English Linguistics* 13. 221-247.
- Jackendoff, Ray S. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge: MIT Press.
- Jackendoff, Ray S. 2002. *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jespersen, Otto. 1928. *Modern English Grammar* III. London: Allen.
- Jespersen, Otto. 1931. *A Modern English Grammar*, Part IV. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Jones, Michael. 1988. Cognate objects and the case filter," *Journal of Linguistics* 24. 89-110.
- Kajita, Masaru. 1977. Towards a dynamic model of syntax. *Studies in English Linguistics* 5. 44-76.
- Kajita, Masaru. 1983. Grammatical theory and language acquisition. Paper presented at the symposium at the 3rd Annual Meeting of the English Linguistic Society of Japan.
- Kajita, Masaru. 1984. Eigokyoiku to kongo no seisei bunpo [English education and generative grammar for the future] In Ukaji, Masatomo (ed.) *Gengo-Huhensei to Eigo no Togo-Imikozo ni Kansuru Kenkyu* [Studies on linguistic universals and English syntactic and semantic structures]. 60-87. Tokyo: Tokyo Gakugei University.
- 梶田優 (1985) 「文法の拡張—基本形から変種へ」『英語教育』4月号, 38-40.
- Kajita, Masaru. 1986. Chomski kara no mittu no bunki-ten [Three turning points of diversion from Chomsky]. *Gengo* [Language]. 15.12. 96-104.
- Kajita, Masaru. 1994. The temporal dimension in the theory of language. Paper presented at the Nov. regular meeting of the Tokyo English Linguistic Circle.
- Kajita, Masaru. 1997. Some foundational postulates for the dynamic theories of language. In Ukaji, Masatomo, Toshio Nakao, Masaru Kajita & Shuji Chiba (eds.) *Studies in English linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday*. 378-393. Tokyo: Taishukan.
- Kajita, Masaru. 2002. A dynamic approach to linguistic variations. In Yasuhiko Kato (ed.) *Proceedings of the Sophia symposium on negation*. 161-168. Tokyo: Sophia University.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami. 2004. *Functional Constraints in Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- 小薬哲哉. 2010. 「動作表現構文における他動性」『英語語法文法研究』17号. 67-82.
- Larson, Richard K. 1988. On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19. 335-391.
- MacWhinney, Brian and Catherine Snow. 1990. The child language data exchange system: An update. *Journal of Child Language* 17. 457-472.
- Mamiya, Yuka. 2011. *On Passives of Cognate Object Constructions*. BA Thesis. Nagoya University.
- Matsumoto, Masumi. 1996. The syntax and semantics of the cognate object construction. *English Linguistics* 13. 199-220.
- 大室剛志. 1988. 「英語における半動名詞構文について」『言語文化論集』第10巻, 第1号. 45-65. 名古屋大学.
- 大室剛志. 1990. 「同族目的語構文の特異性 (1)」『英語教育』11月号. 74-76.

- 大室剛志. 2000. 「基本形と変種 : I'd rather you didn't. をめぐって」『英語教育』12月号, 34-36.
- 大室剛志. 2004. 「基本形と変種の同定にあずかる大規模コーパス—同族目的語構文を例に」『英語コーパス研究』11号. 137-151.
- 大室剛志. 2013. 「構文に見られる拡張」『第85回大会 Proceedings』. 205-206. 日本英文学会.
- 大室剛志. 2015. 「動名詞から分詞への変化: 動詞 spend の補部再考」『言語研究の視座』. 154-171.
東京: 開拓社.
- Poutsma, Hendrik. 1928. *A Grammar of Late Modern English*, Part II, Groningen: P.Noordhoff.
- Rice, Sally. 1987. *Towards a Cognitive Model of Transitivity*. Doctoral dissertation. University of California, San Diego.
- 柴崎礼士郎. 2015. 「現代アメリカ英語の二重コピーラ構文」『日英語の文法化と構文化』, 147-180.
東京: ひつじ書房.
- Sweet, Henry. 1891. *A New English Grammar*, Part I. Oxford: Clarendon Press.
- 高見健一・久野暲. 2002. 『日英語の自動詞構文』東京: 研究社.
- 滝沢直宏・大室剛志. 2004. 「[lexigram: 01555-01558] THING make one's (ADJ) ways」
LEXIGRAM 研究会メイリングリスト.
- Yagi, Takao. 1984. Togoron no yuhyosei riron [The markedness theory of syntax].
Gengo[Language]13.1. 238-24.